

北海道医療大学学術リポジトリ

読むことと考えること : 『新約聖書』 『莊子』

著者	小澤 次郎
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	18
ページ	1-8
発行年	2011-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006334/

読むことと考えること ——『新約聖書』『莊子』——

小澤 次郎

抄 録：本稿は、聖典の読みを通して、古今東西の「叡智」に触れることを目的とする。2011年度前期に於ける「基礎ゼミナール」で読んだ聖典から『新約聖書』を、ほかに『莊子』を検討した。具体的には、1)『新約聖書』のイエスの荒野での試練の意味を検討した。2)『莊子』では言語の恣意性の問題を検討した。

キーワード：新約聖書、荒野、試練、イエス、バプテスマ、悪魔、サタン、莊子、万物斉同、言語、恣意性、分節化、個、普遍。

1 ^{あら}の曠野における試練の意味とは？——『新約聖書』

なぜ、『悪』が一神教において存在し得るのだろうか？

この問題はわかっているようでありながら、実はあまりつきつめて考えられているわけではないようである。そもそも全知全能である神が創造する世界において、神がその存在を意図せぬ限り、『悪』の存在する可能性は皆無である。しかし、もしそうだとすると、本来、至善なる神がみずからに相反する『悪』を創造していたことになるという、はなはだ理会しにくいことになってしまう。

そこでここでは、この問題を掘り下げて明確に検討するために、イエスが救世主として現れるとき、^{あら}の曠野で40日の間にわたり試練をうけたと伝えられている——その曠野における^{クリスト}の試練の挿話を対象にして考察する。

イエスが曠野で40日の間にわたり試練をうけたときに、悪魔によって誘惑される出来事は、たとえ基督教徒でなくとも耳にしたことのある、よく知られた挿話である。この挿話は、新約聖書（岩波書店 2004b）における四福音書のうち、つぎの三つの福音書（佐藤研 2004）に記されている。すなわち、『マルコの福音書』『マタイの福音書』『ルカの福音書』の三つの福音書である。では、この順に従ってみてゆくことにする。

まず『マルコの福音書』では、はじめにイザヤの預言通りにバプテスマのヨハネが曠野に登場するところから語られる。そして、このバプテスマのヨハネによって、

救世主イエスの現世への到来が予告される。この預言者イザヤの預言を引用することによって、ユダヤ教の旧約聖書（岩波書店 2004b, 日本聖書協会 2006）の世界を円滑に連続させる配慮を通して、新約聖書の世界がはじまるのだ。

預言者イザヤ〔の書に次のよう〕に書いてある——

「見よ、私はお前の面前に私の使者を遣わす。彼は
お前の道を整えるであろう。^{あら}の曠野で呼ばれる者の声——、『お前たち、主の道を備えよ。彼の^{こみち}小径を直くせよ』。この〔言葉の〕ように、浸礼（バプテスマ）を施す〔者〕ヨハネが曠野にあらわれ〔もろもろの〕罪の赦しとなる回心の浸礼を宣べ伝えていた。そして、ユダヤの全地方とエルサレムの全住民とが彼のもとに出て行き、自らの〔もろもろの〕罪を告白しながら、ヨルダン河の中で彼から浸礼を受けていた。（マルコ 1：1－5）

とある。このときバプテスマのヨハネが宣教した内容は、「私（＝バプテスマのヨハネ）よりも強い者（＝イエス）が私の後から来る」こと、そして「私はお前たちに水で浸礼を施した。しかし彼こそはお前たちに聖霊によって浸礼を施すだろう」ことをいう。そしてまさにその言葉どおりに、イエスはバプテスマのヨハネによってヨルダン河で浸礼を施されることになる。

浸礼 *baptisma* とは、「洗礼」とも訳されるが、もともと『水に浸されきること』を意味する。旧約聖書における『洪水』『大水』（詩編 42, 詩編 69）などは、たとえばバビロニアなどの古代神話にみられる場合と同様に、

《混沌》や《死》と深くかかる現象として理會されていた。だから水に浸りきる行為は、《象徴的な死》を意味し、それを通過することで《象徴的に新たな生》へと変化することになるわけである。それに加えて、もちろんユダヤ教の祭司が、病などからの《清めの儀式》に《新鮮な水》をもちいること（レビ記 14）からも、水のもつ文化的な浄化作用を認めることができるだろう。

これらのことを踏まえて、バプテスマのヨハネが、浸礼を救済儀式として確立したことが推測できる。浸礼を施されることによって、人びとがみずから犯してしまった悪事を告白し、心から罪を悔い改めて、神に赦しを願うとき、からだ全体を水のなかに浸しきることによって罪の汚れから浄化されて《再生》、つまり清められた存在として《生まれ変わる》のである。人間であること自体が《原罪》によって罪ある存在とみなされる以上、《人の子イエス》もまた、この罪から逃れることはできず、清めを施されねばなるまい。イエスといえども、人間となっている以上、浸礼を施されなければならぬ必然性を背負っている。そしてイエスは浸礼を施されたのち、つぎの出来事に直面する。

すると、霊がすぐに彼（小澤注、＝イエス）を荒野に送り出す。そこで彼は、サタンによって試みられ続けながら、四十日間荒野にいた。そして彼は野獣たちと共におり、御使いたちが彼に仕えていた。（マルコ 1：12－13）

と、『マルコの福音書』ではかなりシンプルに叙述される。この記述における《40日間》にわたるイエスの曠野での試練は、もちろん『出エジプト記』においてモーセに率いられたイスラエルの民がエジプトから迫害から逃れて、神によって決められた「約束の地」（＝カナン）へ赴くまでの《40年間》にわたる流浪、律法と掟をまもることができるかどうかをためされる「荒野」での試練を踏まえたものである。

この《40という数》が特別な意味を持つことも注意されてよいだろう。それはモーセが神の山（＝シナイ山）に登ってそこに籠った期間を《40日40夜》としたこと（出エジプト記 24：18）、あるいは、エリヤが《40日40夜》の間、歩き続けて神の山に到着して、神の啓示を受けたこと（列王記上 19：18）などの出来事から明らかである。

＊

さて、ここで問題となるのは、イエスを荒野に送り出したとされる「霊」の存在である。というのも、なぜ「霊」が必要なのかが、実は判然としないからである。

つまり、浸礼を施されたイエスが自分で荒野を旅し、そこで人間の救済を妨げようとするサタンによって誘惑された、とした方が話の筋としては明快である。ちょうど仏教説話において、菩提樹の下で悟りをひらき、迷える人々を救済しようとする世尊を、悪魔が邪魔に思っ

て妨害するのと同じような結構となる。ところが、『マルコの福音書』の場合、叙述に従うかぎり、そうはならない。それでは、ほかの福音書の場合はどうだろうか、検討してみよう。『マタイの福音書』においては、つぎのように叙述されている。

その後、イエスは霊によって荒野に導き上げられた。悪魔によって試みられるためである。そして彼は四十日四十夜断食し、その後飢えた。（マタイ 4：1－2）

とある。そして、そこに悪魔が現れてイエスに言う、「お前が神の子なら、石をパンになるように命じてみる」という誘惑に対して、イエスが「人はパンのみで生きるものではない」と答えたという有名な問答の場面になる。ここでもやはりイエスは霊によって導かれたとされる。ここからわかるように、『マルコの福音書』と比較した場合、共通点があるものの、『マタイの福音書』のほうが《悪魔によって試みられるため》として、その目的を明確化している。また、《飢え》を記すことで、『出エジプト記』におけるモーセに率いられたときの荒野での試練を、より一層、想起させる筋立てとなっている。この飢えを救うために、旧約聖書では、神によってマーンという食物が天から降る（出エジプト記 16：35）。

それでは、つづいて今度は『ルカの福音書』における当該箇所をみてみよう。同じようにイエスは、バプテスマのヨハネから浸礼を施されたのち、つぎのように叙述される。

さて、イエスは、聖霊に満ちてヨルダン河から戻った。すると〔その〕霊によって荒野を連れ〔回され〕、四十日間悪魔の試みを受け続けた。そしてそれらの日々の間、何も食わず、それらの〔日々〕が終った時、彼は飢えた。（ルカ 4：1－2）

とある。このあと、『マタイの福音書』と同様に、悪魔がイエスに「お前が神の子なら石に命じてパンになるようにしてみろ」と挑発し、それに対してイエスが「人はパンのみで生きるものではない」と答えた、お馴染みの場面となる。

これら三つの福音書の叙述に相違が認められるのは、

それぞれの福音書の成立事情に深くかかわる問題である。佐藤研（2004；915－917）によれば、以下のようになる。『マルコの福音書』の場合、著者は非ユダヤ系の基督教徒とし、執筆年代は紀元後70年代頃、執筆場所はおそらく南シリアかとみている。『マタイの福音書』の場合、著者は通説ではユダヤ系の基督教徒とするが、非ユダヤ系の基督教徒かもしれないという。執筆年代は紀元後80年代、執筆場所は希臘語が使われた西シリアの都市とみている。内容はマルコの福音書を一次資料に、Q文書とマタイ固有の特殊資料をもちいたと推定する。『ルカの福音書』の場合、著者は最近の研究をふまえて非ユダヤ系で「神を畏れる者」から改宗した基督教徒ではないかという。当時のヘレニズム文化世界における高度な教育を受けていると推測している。執筆年代は紀元後80年代、執筆場所はエジプトとパレスティナ以外の地中海沿岸の、ユダヤ教に強く影響された大規模の都市とみている。内容は、マタイの福音書と同様に、マルコの福音書を一次資料に、Q文書とルカ固有の特殊資料をもちいたと推定する。

いずれにしても、大筋ではまず『マルコの福音書』が最初に成立し、それを枠組みとして『マタイの福音書』『ルカの福音書』が成立していったものとみて差支えあるまい。これは、『マルコの福音書』ではイエスの曠野での試練がシンプルに叙述されていたものが、そのあとで成立していった『マタイの福音書』や『ルカの福音書』では、「霊」に連れて行かれた目的が明確化されるかたちで合理的説明が加えられ、描写もより具体的な叙述になったことからみて間違いない。

＊

すでに引用した三つの福音書を読む限り、これら引用箇所における「霊」は《聖霊》と理会してよい。しかし、さらに詳細に検討するため、該当箇所の希臘語と英訳（Zondervan1998）をみることにする。便宜上、希臘語を、^{ラテン}羅^{ローマ}文字（羅馬字）で記載する。

「霊」の希臘語と英訳：

『マルコの福音書』：	to pneuma	the Spirit
『マタイの福音書』：	hupo tou pneumatou	by the Spirit
『ルカの福音書』：	en to pneumatō	by the Spirit

「サタン」「悪魔」の希臘語と英訳：

『マルコの福音書』：	hupo tou Satana	by Satan
『マタイの福音書』：	hupo tou diabolon	by the devil
『ルカの福音書』：	hupo tou diabolon	by the devil

はじめに「霊」と日本語訳される希臘語pneumaの意味を検討してみよう。対応する英語でSpiritと訳される語彙pneumaには、つぎのような意味がある。

wind, breath, spirit, inner life, spirit (being), Spirit

ここで注意しておかねばならぬことは、大文字表記the Spiritの場合は、一般的な意味における霊spiritのことでなく、《特別な霊》すなわち《聖霊》the Holy Spiritを意味していることである。

根拠は、以下の通りである（聖書英訳はThyndale 1990）。第一に、『マルコの福音書』でバプテスマのヨハネが《自分（＝ヨハネ）は水で浸礼を施すのに対して、後から来る者（＝イエス）は聖霊the Holy Spiritによって浸礼を施す》と語っていたことがあげられる。第二に、浸礼を施されたイエスをとりまく聖書の叙述があげられる。『マルコの福音書』では、霊the Spiritがハトの姿のように天からイエスのもとに舞い降りてくることをしるす。『マタイの福音書』では、神の霊the Spirit of Godがハトのように舞い降りて来るのを、イエスが見たとしるす。『ルカの福音書』では、聖霊the Holy Spiritがハトの姿のようにイエスのもとに舞い降りて来たとして、さらにその後、先に引用したように「聖霊the Holy Spiritに満たされた」としるす。したがって、これらの三つの福音書の叙述をみるかぎり、この「霊」the Spiritとは「聖霊」the Holy Spiritのことだと看做することができる。もちろん、これらの叙述における希臘語が、すべてpneumaであることは言うまでもない。

さて、このことをふまえて、希臘語pneumaの語意にもどってみる。そうすると、この言葉の意味として、「霊」の意味のほかに、「風」や「息」のあることが注目される。むろん、「風」と「息」の意味の類縁性には問題はない。なぜなら、たとえば神話を題材としたボッティチェッリの名画「プリマヴェーラ」「ヴィーナスの誕生」では、ゼフエロス（西風の神）が息を吹きかけることで、春をもたらすとされた西風の吹く様子を寓意的に描いているからである。一方また、「息」と「内的な生命」の意味の類縁性は、『創世記』において、神が人間アダムを創造した際、神が息を吹き込むことで命をもたらしたことから、その繋がりを知ることができる。

要するに、「霊」という単語には、「風」「息」「内的な生命」という意味が、意味の類縁性という絆によって、さながら円環を描くが如くに繋がっているわけだ。このことは日本語訳の「霊」という言葉だけでは、希臘語の語彙pneumaの、本来、保持している「息」や「内的な生命」という、意味の豊穡性が欠損することを示す。

これを簡単に翻訳上の問題として片づけるわけにはい

かない。もし仮にpneumaを「風」や「息」として理会するならば、浸礼を施されたイエスは、「神風（＝神の息）」に象徴されるような圧倒的な神の力によって、試練の場の曠野へと、イエス自身の意思とはまったく無関係に、まさに有無も言わず吹き飛ばされるかのように移されてしまうことになるからである。そこには、その直前にしめされた慈愛に満ちた神とは明らかに異なるかのような、旧約聖書でしばしば叙述された、畏怖されるべき絶対的存在としての神が顕現している。あるいは、また仮にpneumaを「内的な生命」として理会するならば、浸礼によってイエスの内面に宿る《神性》が、イエスの自発的な選択判断を促すかのように働きかけて、試練の場の曠野へと、イエス自身の自由意思によって赴くことになる。そこには神に与えられた使命に対して、自身の自由意思に基づいた同意と行動、それにともなう過酷な結果責任をわが身に引き受ける、神の子としての《実存》の姿が顕現する。

それに加えて、希臘語hupoは、当該箇所英訳にbyとしてあるが、実際は以下のような意味がある。

by, at the hand of (gen.) ; under, below (acc.)

とある。この場合、格支配を根拠として推定すれば、前者の「～によって」「～の手で」の意味であることがわかる。また、『ルカの福音書』における希臘語enは、当該箇所英訳はbyとしてある。けれども、この語には次のような意味がある。

in, on, at, near, to, before, among, with, within, when

とある。このなかで、文脈に合わないものを除外した場合、必ずしも「～によって」でなければならないこともない。たとえば「～のなかに」「～とともに」という解釈も出来ないわけではなく、『ルカの福音書』の「聖霊に満たされた」をふまえれば「霊の中であって」という訳も十分に可能である。そうなると、それにともなって、先ほどのpneumaの解釈もまた、それほど単純に「霊」でよしとして済ませられなくなるのである。

＊

不思議なことに、曠野やでイエスに試練を与えるものも、『マルコの福音書』と『マタイの福音書』『ルカの福音書』とでは異なっている。この『マルコの福音書』と『マタイの福音書』『ルカの福音書』における、「サタン」と「悪魔」の叙述の相違もまた、先に述べた成立事情によるものとみてよからう。

さらに考察を深めるために具体的に検討してみる。前

者の『マルコの福音書』では「サタン」となっている。この「サタン」の希臘語Satanas（引用箇所ではSatanas）の英訳は、

Satan, the Adversary

である。このthe Adversaryについては後述する。

一方これに対して、後者の『マタイの福音書』『ルカの福音書』では「悪魔」となっている。この「悪魔」の希臘語diabolos（引用箇所ではdiabolon）の英訳は、

slandorous ; the devil (subst.)

である。文脈から、受動態の文章を能動態に改めれば主語となることから、ここはthe devilと看做して差支えない。

ここで注目されるのは、やはり『マルコの福音書』にみられる「サタン」の英訳the Adversaryだろう。これは《逆なる者》《反する者》を意味する。わかりやすく言うならば、《神》とは《方向を逆にした存在》、すなわち《善》に対する《悪》である。中世ヨーロッパにおいて、しばしばサタンや悪魔が、逆さになって表現されるのは、もともと精神性における方向性を視覚的な方向性にも適用させることによって、庶民にも見て理會しやすく形象化したものといえる。そして、こうした《善》対《悪》の対峙は、最後に対立の結果、《善》へと収斂することで終わるという終末論へと至る。サタンや悪魔が、天使であったことを想起すれば、その結末は自明のことである。ここに古代オリエントの宗教世界における善悪二元論の世界観の影響を受けながらも、それとは全く異なる一神教の世界観が存在する。

そこでは、《悪》は《善》を認識するためのあくまで方便にしか過ぎない。だから《悪》は、《善》の問題を相対化することによって、その存在そのものを問うものではないのだ。

それなら、そもそも《善》は《善》だけの立場からその存在意義を考えればよいのであって、《悪》による試練など必要ないのではないだろうか。

ここに至ってさらに議論を深めるために、われわれは莊子を読んで考えることになる。

2 万物斉同と恣意性とは？——『莊子』

ここで問題となるのは、相対立するものをどのように考えればよいかであるが、この問題を考察するうえで、興味深い議論を『莊子』が提示している。

◆本文（金谷 1971；54－55，岸 2008；90－91，〔※左記を参考に小澤作成〕）：

物無非彼、物無非是。自彼則不見、自知則知之。故曰、彼出於是、是亦因彼。彼是方生之說也。雖然方生方死、方死方生。方可方不可、方不可方可。因是、因非、因非因是。是以聖人不由而照之于天、亦因是也。是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有彼是乎哉、果且無彼是乎哉。彼是莫得其偶、謂之道樞。樞始得其環中、以應無窮。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰、莫若以明。

◆書き下し文（金谷 1971；55－56，森〔1994；180，2001；37〕，岸 2008；90－91，〔※左記を参考に小澤作成〕）：

物は彼にあらざるはなく、物は是にあらざるはなし。彼よりすれば則（＝乃）ち見えざるも、おのづから知れば則（＝乃）ち之を知る。故に曰く、「彼は是より出で、是は亦彼に因る」と。彼と是と方に生ずるの説なり。然りと雖も、方に生ずれば方に死す、方に死すれば方に生ず。方に可なれば方に不可なり、方に不可なれば方に可なり。是に因りて非に因り、非に因りて是に因る。是を以て聖人は由らずして之を天に照す、亦（＝惟）だ是に因るなり。是も亦彼なり、彼も亦是なり。彼も亦一是非なり、此（＝是）も亦一是非なり。果たして且た彼と是とありや、果たして且た彼と是となきや。彼と是とその偶を得る莫き、之を道樞と謂ふ。樞にして始めてその環中を得るや、以て無窮に應ず。是も亦一無窮なり、非も亦一無窮なり。故に曰く、「明を以てするに若くはなし」と。

◆現代語訳（金谷 1971；56－57，森〔1994；181－182，2001；37－38〕，岸 2008；89－90，〔※左記を参考に小澤作成〕）：

（すべての物においては、）《あれ》と呼びえないものはなく、また《これ》と呼びえないものはない。それなのに、なぜ離れているものを《あれ》と呼び、近いものだけを《これ》と呼ぶのか。離れている《あれ》の立場からは見えないことでも、近い自分の立場から《これ》を見ると、よく理合することができる。だから身に近いものを《これ》と呼んで親しみ、遠いものを《あれ》と呼んで差別しているにすぎない。だから、つぎのように言える。《あれ》という概念は自分の身を《これ》とするところから

生じたものである、《これ》という概念は《あれ》という対立者をもととして生じたものである。つまり《あれ》と《これ》とは相並んで生じるものであり、互いに依存し合っているのである。しかしながら、このように依存し合っているのは、《あれ》と《これ》とだけではない。生に並んで死がある、死に並んで生がある。可に並んで不可がある、不可に並んで可がある。是をもとにして非がある、非をもとにして是がある。すべてが相対的な対立にすぎず、絶対的なものではない。だからこそ聖人は、このような相対差別の立場によることなく、これを天に照らす——人為の差別を越えた、自然の立場から物を見るのである。それは、是非の対立を越えた、真の是に身をおくものといえよう。

このような是非の差別をしない自然の立場から見れば、《これ》と《あれ》との区別はなく、《これ》も《あれ》であり、《あれ》もまた《これ》であるという、同一のものとなる。たとえば是非を立てる者があるとしても、《あれ》は《あれ》の立場をもとした是非を立てているにすぎず、《これ》は《これ》の立場をもとした是非を立てているにすぎない。それに、もともと《あれ》と《これ》との区別が実在しないのか、根本的に疑問ではないか。

このように《あれ》と《これ》とが、その対立を消失する境地を、「道樞」という。樞——扉の回転軸は環の中心の穴に嵌められることにより、無限の方向に対応することができる。この「道樞」の立場に立てば、是も無限の回転をつづけ、非もまた無限の回転をつづけることになり、是非の対立はその意味を失ってしまう。先に「明らかな知恵で照らすのが第一である」といったのは、このことにほかならない。

これは『莊子』(内篇)「齊物論篇、第二」の一節である。ここで莊子は、この世にある物象はあまねく相対的なものに過ぎないものであること、すなわち、その思想の要諦において、森羅万象すべてが斉しい存在であるに過ぎぬことを提唱する。古来より、莊子の思想の一端をみごとに表現した文章として、江湖に知られてきた箇所である。森三樹三郎（1994；177）によれば、齊物論とは文字どおり《物を斉しくするの論》のことで、万物には区別や差別がなく、すべてがひとしい価値をもつことを主張する論の意味という。さらに続けて《万物斉同》《絶対無差別》という莊子の根本的な立場を、認識論的な角度から明らかにしようとする『莊子』のうちで最も重要な篇であるという。

＊

ここで注目しておきたい要点は、つぎの2点である。

第一の要点は、思惟を展開するうえで言語の本質を、指示語「彼（＝あれ）」「是（＝これ）」に代表させた点である。これは、ソシュールの言語学の本質の一端を、すでに二千年以上もまえに、先取りした議論として注目に価する。

本文中の「物」とは、必ずしも「物質」だけに留まるような意味で用いられてはいない。ここは《この世にある森羅万象》をさしているものであるとみる方がよいだろう。そしてそのうえで莊子は、こうしたこの世にありとある森羅万象を言語化するという行為は、実は《実体》に基づくものとして森羅万象を理会することではなく、むしろそれらの《関係》性に基づくことによって、《意味（＝価値）》を生成する行為であると指摘する。すべての物象を《あれ》ということもできるし、あるいはまた、すべての物象を《これ》ということもできる、というのである。したがって、もし仮に《関係》さえ変化することがありえるならば、そしてそれは当然のことながらありえるわけだが、そのときは《あれ》が《これ》に変わることもありえるわけだし、一方また、《これ》が《あれ》へと変わることもありえるわけだ。もちろん、このとき莊子は、万物の流転を、無常の相のもとにながめているわけではない。

ここで看過してはいけないことは、《あれ》と《これ》が相互に依存する関係にあること、ちょうどコインの表と裏のように表裏で一体となっているわけで、表または裏だけでは存在し得ぬことを忘れてはならないということだ。つまり、すべての物象を《あれ》といってもよく、また、《これ》といってもよいが、たとえそうした場合でも、すべてを《あれ》といったとしてもそこには《あれ》に対峙する《これ》が想定されており、また、すべてを《これ》といったとしてもそこには《これ》に対峙する《あれ》が想定されている。その意味で、《あれ》と《これ》とは、同時に発生して併存しているといつてよい。

第二の要点は、こうした《あれ》と《これ》の分節化は、本来、二重の恣意性に基づいて発生し併存しているということである。そしてその恣意性は、《善》と《悪》の分節化においても認められることである。

二重の恣意性とは、一つ目は、言語における《記号表現》と《記号内容》との結びつきである。このことは、理論の上では、何を《あれ》といってもよく、また、何を《これ》といってもよいこと、さらに何を《善》としてもよく、また、何を《悪》としてもよいことにしめされる。わかりやすく言えば、《記号表現》と《記号内

容》とが一対一対応で結びついていないということだ。たとえば、もし記号表現「犬」が記号内容「動物のイヌ」しか表していないとするならば、「あいつは政府の犬だ」という比喻は使えないことになる。「あいつ」は「ヒト」であって、「イヌ」ではないからだ。『莊子』においてしばしばみられる《寓言》というキーワードは、もちろんこうした認識の上につらなるものである。

二重の恣意性の二つ目は、現実世界を分節化する方法は、理論上は、自由であるということである。もちろん、《あれ》と《これ》、または、《善》と《悪》という分節化がいちどなされると、その共同体においてはある程度決まった意味に使われる。しかし、《分節化》という営為は、実体とはまったく異なっており、いちどなされた分節化をなんどでも見直すことが可能なのである。場合によっては、そのような分節化を無効とすることも可能だ。だからこそ、人びとが当たりまえのように信じている《あれ》と《これ》の区別、あるいは、《善》と《悪》の区別を、根底から見直すことが可能となる。そのことを『莊子』は指摘している。

しかし、それでも疑問は残る。つまり個体としての人間は、どうだろうか。単子論を挙げるまでもなく、人間は個体としての存在を逃れることはできない。いくら人生を夢のようだと言っても、やはり個体としての自己は厳然として存在するように感ぜられる。

＊

この疑問を検討するうえで、『莊子』には次のような興味深い挿話があるので、それをみてゆこう。

◆本文（金谷 1975；282，〔※左記を参考に小澤作成〕）：

僧子與恵子遊於濠梁之上、莊子曰、鯈魚出遊從容、是魚樂也。恵子曰、子非魚、安知魚之樂。莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂。恵子曰、我非子、固不知子矣、子固非魚也、子之不知魚之樂、全矣。…後略…

◆書き下し文（金谷 1975；282，森 2001；425〔※左記を参考に小澤作成〕）：

さうじ けいし がうりやう ほとり
莊子、恵子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、「鯈魚、
出でて遊びて從容たり。是、魚の楽しみなり」と。
恵子曰く、「子は魚にあらず。安んぞ魚の楽しみを
知らん」と。莊子曰く、「子は我にあらず。安んぞ
我の魚の楽しみを知らざるを知らん」と。恵子曰く、
「我は子にあざれば、固より子を知らず。子
も固より魚にあざるなり。子の魚の楽しみを知ら

ざること、^{まつた}全し」と。…後略…

◆現代語訳（金谷 1975；283，森〔1994；231－232，2001；425－426〕，〔※左記を参考に小澤作成〕）：

莊子は、恵子（＝^{けいし}恵施）と一緒に、濠水を渡る飛び石のあるあたりで遊んだことがあった。そのとき、莊子が言った。「^{はや}鯢がゆうゆうと泳ぎまわっている。これが魚の楽しみというものだ」と。そこで、恵子が言った。「きみは魚ではない。魚でないきみに、どうして魚の楽しみをわかるだろうか。いや、わかるまい」と。莊子は答えた。「きみはほくではない。だから、どうしてほくが魚の楽しみをわかっているかどうか、わかるはずがないよ」と。だが、負けずに、恵子が言った。「なるほど、ほくはきみではないので、もちろん、きみの心はわからない。だが同じように、きみもちろん魚ではないのだ。きみが魚の楽しみをわからないことも確実だよ」と。…後略…

これは『莊子』（外篇）「秋水篇、第十七」の一節である。恵子（恵施）は、莊子と同時代の人物で交友があり、戦国時代の梁（＝魏）の宰相としても、また、名家（論理学派）としても著名な人物である。

さて、恵子は実体論に基づく立場から、ある種の不可知論としての認識をしめしている。これに対して、莊子は論理の世界を逍遥するかのよう、恵子の論理を逆手にとるかたちで反論する。さらにこれに恵子は反駁を加えることになる。いっけん、遊びのような議論のやりとりのなかに、合理的な判断に基づくかのような不可知論にひそむ真理の深淵が垣間見えるのだ。『莊子』としては、こうした問題をつねに問いかけ、反論することによって、精神を活性化し、もって真理につながろうとしているのではないだろうか。

《自己》がある限り、《自己以外のもの》が理会できるかどうか。

この問題は、《個》と《普遍》という、重要なテーマを含んでいる。そもそも、人間が神を理会しえないから、あるいは人間としての自己の存在を理会しえないから、先にあげた聖書のような議論が生ずるわけだし、同

様に、莊子のような万物斉同や不可知論のような議論も生じている。この検討を通して、《自己以外のもの》が理会できるかという問題、《個》と《普遍》という問題に、われわれは直面することになった。

＊

最後に、本稿は平成23年度前期看護福祉学部看護学科1年「基礎ゼミナール」の導入教育として「聖典」の授業で行なった内容を契機とする。参加した学生諸君に感謝申し上げる。

文 献

金谷__治（1971）：『莊子』第一冊〔内篇〕，金谷__治訳注，岩波文庫，1971年5月。

金谷__治（1975）：『莊子』第二冊〔外篇〕，金谷__治訳注，岩波文庫，1975年5月。

森__三樹三郎（1994）：『老子・莊子』，講談社学術文庫，1994年12月。

森__三樹三郎（1994）：『莊子 I』，森__三樹三郎注，中公クラシックス，2001年9月。

岸__陽子（2008）：『莊子』，松枝__茂夫・竹内__好監修，岸陽子訳，徳間文庫，2008年9月。

佐藤__研（2004）：『新約聖書』，新約聖書翻訳委員会編，岩波書店，2004年1月。

岩波書店（2004a）：『旧約聖書 I __律法』，旧約聖書翻訳委員会編，岩波書店，2004年1月。

岩波書店（2004b）：『新約聖書』，新約聖書翻訳委員会編，岩波書店，2004年1月。

日本聖書協会（2006）：『聖書__スタディ版__わかりやすい解説つき聖書__新共同訳』，共同訳聖書実行委員会編，日本聖書協会，2006年9月。

Thyndale (1990) : *The New Greek-English Interlinear New Testament*, tr. by Brown, Robert K., Tyndale House Publishers, Inc. Carol Stream, Illinois, U.S.A.1990.

Zondervan (1998) : *Complete Vocabulary Guide to the Greek New Testament*, Rev ed. ; ed. by Trenchard, Warren C., Zondervan, Grand Rapids, Michigan, U.S.A.1998.

Readings and Considerations the New Testament and Zhuangzi (莊子)

Jiro OZAWA

Abstract : This paper is intended to touch Wisdoms in the world through readings of Sacred Scriptures. Here we consider *the New Testament* and *Zhuangzi* (莊子) from the Sacred Scriptures which we read in Primary Seminar in the introductory education course in 1st semester in 2011 in Nursing Welfare Faculty of Hokkaido Health University. To be concrete, 1) we consider the meaning of the tribulation in the wilderness of the testament of Jesus. 2) we consider the problem of the arbitrariness of language in the *Zhuangzi*.

Key Words : *The New testament*, *Zhuangzi* (莊子), wildness, ordeal, Jesus, baptism, the devil, Satan, the equality of everything, language, arbitrariness, segmentation, pieces and universal.